

繪本拾遺信長記
十

3564
10



門 へ 13
 號 3564
 卷 10



繪本拾遺信長記初篇卷之十

目錄

織部門後名減之幸

小田乃家長官後昇進

小田勢風雨と凌ぎ河村浦(寄奉)

高田門後名討下回後奉

河村為城

重幸奇計破美岩為奉

小田信長加減の城々と改る

繪本拾遺信長記初篇卷之十

早稲田 大學 図書館
 昭 34.6.3 受
 藏 書

城をり人民山林を焼く

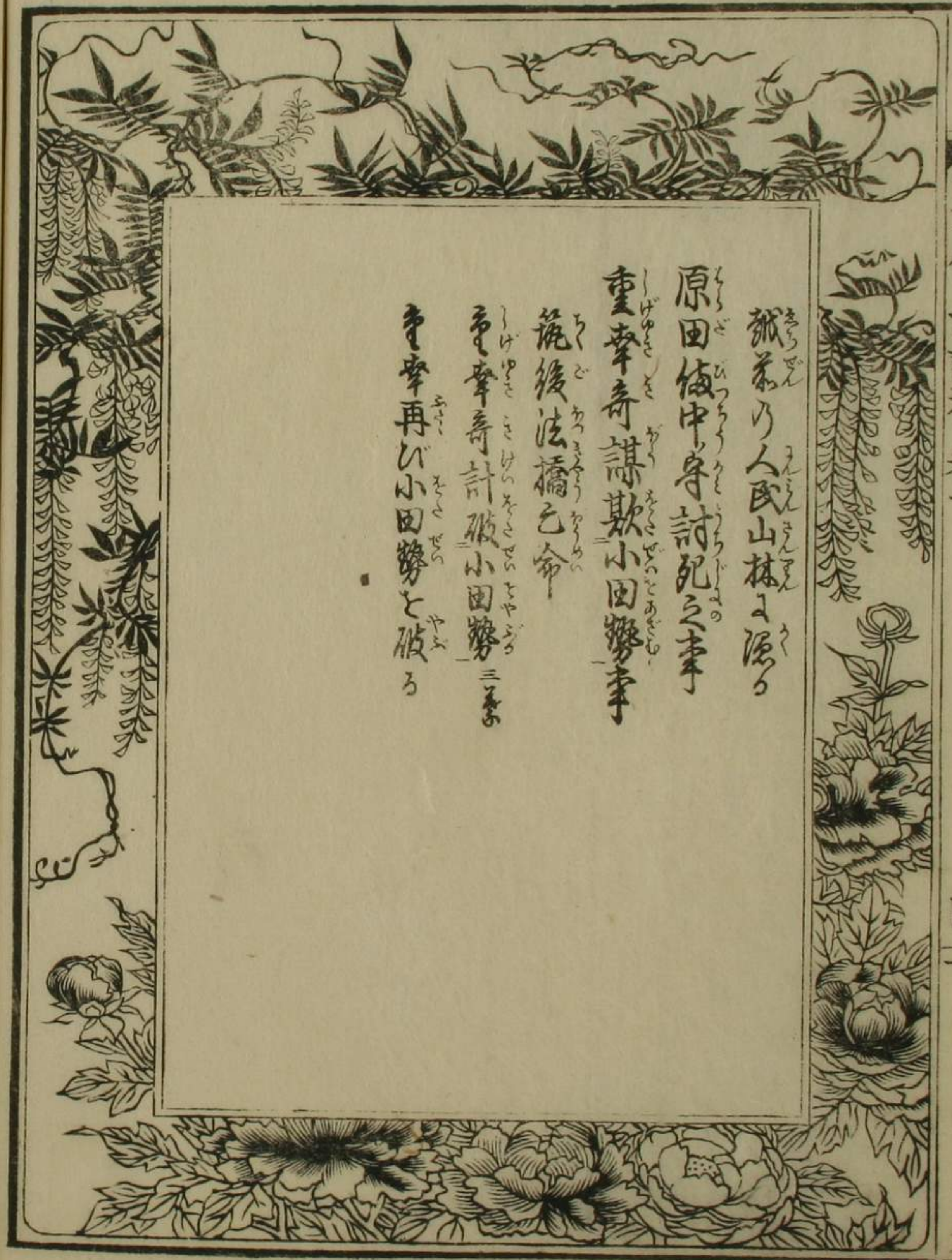
原田佐中守討死之事

重幸奇謀欺小田勢事

流後法橋之命

重幸奇謀計破小田勢

重幸再び小田勢と破る



繪本拾遺信長記初篇卷之十

城をり後多威之之事

時又天正三年八月三日信長卿と右大臣又但せらるるべきの勅定あり
これと信長卿退しとてうるるべし積年忠功の臣下へ御旨と叙し
賜りしを中々奉りて別勅許し給ひ柴田権六郎と修理進正但し
本下友右郎と藤原守又但し姓と羽柴と改む河原と云流し肥前守
堀九郎右衛門を原田佐中守明智十玄流し日向守又但せらるる其
外小田の御旨悉く御旨を進む八月十二日信長卿城をりの一揆
退治の爲とて十万余騎の大軍と御降し敷賀表へ後白あり岩園の
要害虎杖山の城より中回和泉守指針本陣に石田の西光守
并侍の城より大町の中後守河原三郎等籠城し今条中火煙の西城



小田の家信
倉佐昇進

日本信長言初卷十

と下向筑後法橋具津の城に大坂の魯強守河津の城に若林長門守
龍門寺又三宅隆之丞と守り其外つまらぐの城郭又ま又構へ
軍勢を教多勢其其他人敵をうけが容易又礼入せしむるひう
以て久ううう十日に日朝より大雨と覆くるごとく終日終夜小止
りく降りりわると不くの谷川隆津原あり人馬の被束と終り
け時羽柴統元守秀右信長御の御承にゆくやうな今日乃大
雨川の多勢あり諸方の被束と止りゆいれが敵の城に侵入し
こそいりあめは不意に討とんば速なる勝利ありゆくは其軍
勢と列陣し河津府中本目作乃城とま又渡り小園勢の腹と
を控くべふと謹でまことし信長け計略甚よしとく即時兵
船の用意をばしとるごとくとあは秀右一番又船と飛渡り

河津浦へ漕出ぬお法入軍およ明智日向守光秀山崎源太
左津門射池田伴左守等物と教かまて城の刻斗と漕りく暗拍
子採へく細形後ま子の刻と河津浦は若うう秀右下知
て兵船悉く教かま表漕渡り一艘もけ浦に集まらむあさ
は秀右に扱ひく再び船とえのり引退ん心は逃んとあふりの
らふけ洲と洗と腹痛の名と道とよと鳴り捨く美先よの勢
と引かじ河津の城へいしくと押せ周をど門とぞとくうう秀右
のどく城の中は夜中とらひ大雨の時敵を引だしといひひし
らひむまき藤へく治さしよあひげらさ周のあま押とあま
周章ふとあまき防んととる若くこと中へと發きたるあまの軍兵
とや退るの城門と打破り一日と礼と入追追く宴例斬敵首

と九の三百余級燃る若林長門守えんく討たれ搦る道
 且いづくとも力く落失くし若柴明智等物にじりうと勢いひき
 其疾西の刻斗り三宅撞之悪が勢たる龍門寺の燃え押を是
 も日く攻落し三宅をばじり勢燃の門後三百余人切殺し近邊
 の左家民屋を火をうけ一耐又焼立たり火先天よとびりう燃しく
 入るに日本月作の燃をばじり其かろりの附燃とも叶いこころひ
 かん府中とにしく引退きさる所若柴明智と後地回等の軍勢踏
 又納りけ余の火を討たると夢く又喚きつて定又追追被而
 又切立加賀城の門後の百姓三子平斬捨たり屍は大路に撲
 倒り又と入るき界系地の皮は毛は依く加賀乃軍民懼慄く不
 又若狭丹波の國侍信長の下知ればひねり勢の軍兵數多の兵

船又えのり城石の山浦不く又押せ火と放り民家と崩しとち
 て死入とんが小國勢大又勢き下回筑後法橋日和永守等燃と捨
 て好方知りた落美うけ耐柴田修理進勝家いね子修守一族
 多入回玄番允日帯刀良等毛受勝少拜卿又又徳山又玄湯妻右
 近を先じり勢又又余人枚波の燃え押せお楠竹束を衝りへ
 搦りりうて表とるは燃え勢りたる堀の中勢悪慢圖書等叶はじ
 とこの市表切して燃門を押し付け柴田が軍勢死入一城の軍民等
 悉く扱切は燃え火とわけ焼立たり信長諸方の勝軍とて大
 又勇々奉以恩しとん加賀城石の一揆承忽今日討てんこそ不
 承之去民男女あきり加賀城西國の者一人も残り扱切はして我
 勢懐をこそせし例の暴悪跡つり頻てお知とせしとてれ幕

小田の勢
凡雨と
暖か
河地浦
寄る



下の諸郡を長りおとすとして進みたる京田中守安房修賀守
多々阿其九郎不破河内守二万余人を二と臨「京修備三重渡
の村に里」と被して切まり又二の柴田修理進保柴藤為守明
智日向守を又即九渡門編系一徹多三万又五人多羽の越と二息
夷路「九段龍舟橋令傳の庄の向はひく一揆の門後切捨く
押通る又二の藤原多政九渡門佐内茂女勝川九道多二万余
人大持郡と切つる是は依く加賀城をの郷民百姓押のき忍ま
親と矢ひ子と敷とれ然先よ山林へ逃隠ると十万余人の小田の
大軍退まはしく安の山彼石の敷系岩の岡本の藤とより方の
被「刺殺」斬殺とい目し當らぬありとま京後の防りめは
和国の中尾守大岡の守修寺大坂の南光寺石田の西光寺及修

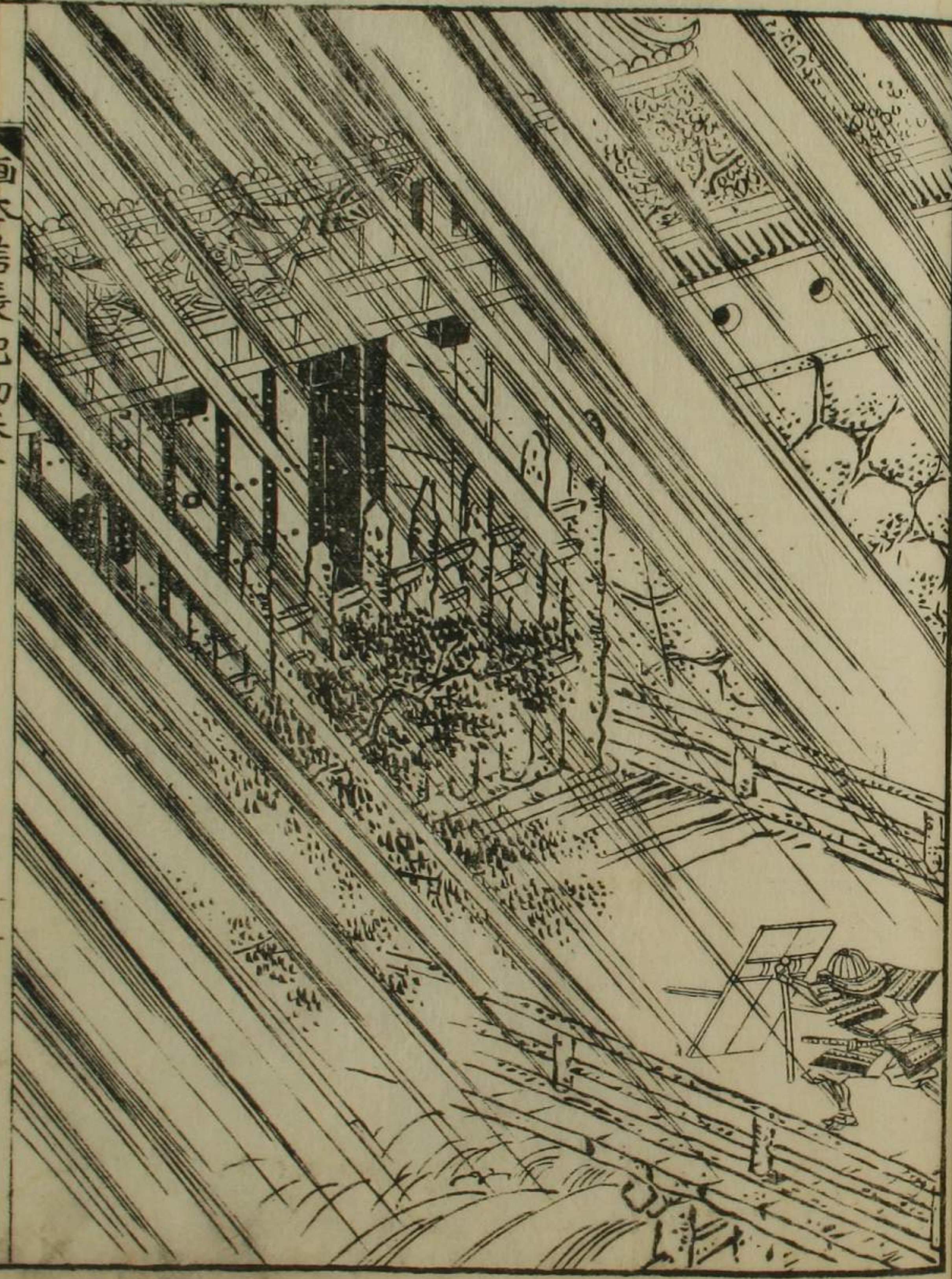
の詔勝守川勝波を即天原吉茂等の勇士をとり殺百人首を
刻ら其其其其孫孫をとり男の求めて殺「慶」寺院坊舎のついで
更方り民家高買の内は隠してり又二道より若は「切捨たれ
記難の難兵多抄集り取神より繩と通」或り百人或り七八十人
一系よ引集り誰某がもに切殺門後百人繩何本又十繩然
搦とこれを付て帳面は記「只此の夢とたつるやうな根系と終し
て亡びやうんる人膽と飛」雪希魂と矢ふ今月十五日より十九
日よむ討えり方首七百餘御民り首二万二ふ二百餘切捨
る男女の殺い幾ふ万ふの殺をよるは室又信長の暴虐なるを
と捨ひ殺をぬい禁紂とるも亦悪と譲るべし「されん天正十
五て京原先秀が殺逆と命と矢ひ家名もよ滅亡せ」天正と

是に佛を以て送るに徳と換ふの因よりものりし後代是と云はれ
とぬじんがみえううに抑加賀頼系の兩國に去る長身二多ふ今
天正三年と九十八年平頼守の所領にして此世の上人御お續
けし也後此は只一附と美云され附節別未といやうううう
し次升なり

高田門後等討下回籠後事

頼系國院より手定し凡に信長御則柴田修理進勝家と小澤道
の惣管と出し頼系一團と場中下居の城より居りて府中の城より
万石の領地を附摩惠多政左衛門多家と場中九月廿六日
城より降りて去る安よ平頼守門後の惣大お下回籠後法橋の今
条の城端で後山林よりと隠し幸き命と賜りて小信長凱陣の

後十月中旬の頃に府中の城の傍に中野村といふ所あり其所
の辻に後法橋を食の神ありておひ居りて瓜ん瓜ん知りて
若のありて夏目村の孫名寺へ告りて瓜ん瓜ん知りて回門
流の寺より後法橋より平頼守門流の國中より先渡せると偏極
えくみえれども平頼守の勢は強き小悪と怒りて押へありて
今度信長が頼守門後を責めさうくとばえきと歎ひて回門村
下野村中村本納付にケ村の回門後を集り信長の御方より
諸大おとこり小平頼守門後の軍民と撥し切敷さんと計り
されば下回籠後が五石瓜んばしより進取の門後百人身徳ひの
辻と丸田と道ははしと罵りて下回籠後今も是とと押ひ
隠しおさうりて三三人斬割し是後又出陣して戦ひりて大



阿_ノ河_ノ 宿_ノ城

勢の百姓八方より巻て後より行槍を以て突殺しつゝ孫名寺
の住持依慧大士小致ひ其以の守護御堂回修理進(其首を
差切)ぬ勝家死んで首信長卿の上免は爲(孫名寺)感状
とせしつゝ其辭は曰く

今度下回後法橋波討捕忠節無比歎ひ其方
門後歸来人を不可別依之狀如件

修理進勝家

天正三年十月十八日

石田門後黒田村孫名寺住持

去りて小摺州石山中致守より加賀越前兩國信長が兵入國
中の門後等致つる斬殺されぬと追く後進しつゝ其れの人と

とせしめしつゝ一山の人々大士小致し加賀越前信長が兵に属せば
勢ひは柔じて當表(押来)せし小國より兵糧の運送をせし其
方の障り致し其致し二大寺の役とて人より相激を飛し諸
國の門後とせしつゝ其辭は曰く

今度越前(致)入のよしけしつゝ當寺の二大寺を籠
城に免れ此より何方より致しきやうな事よ付けし
懇志をせしつゝ一筋又籠城はる心押の衆中や合
系とせしつゝあつていよく致しき次第は人々
あつて

天正三年八月廿八日

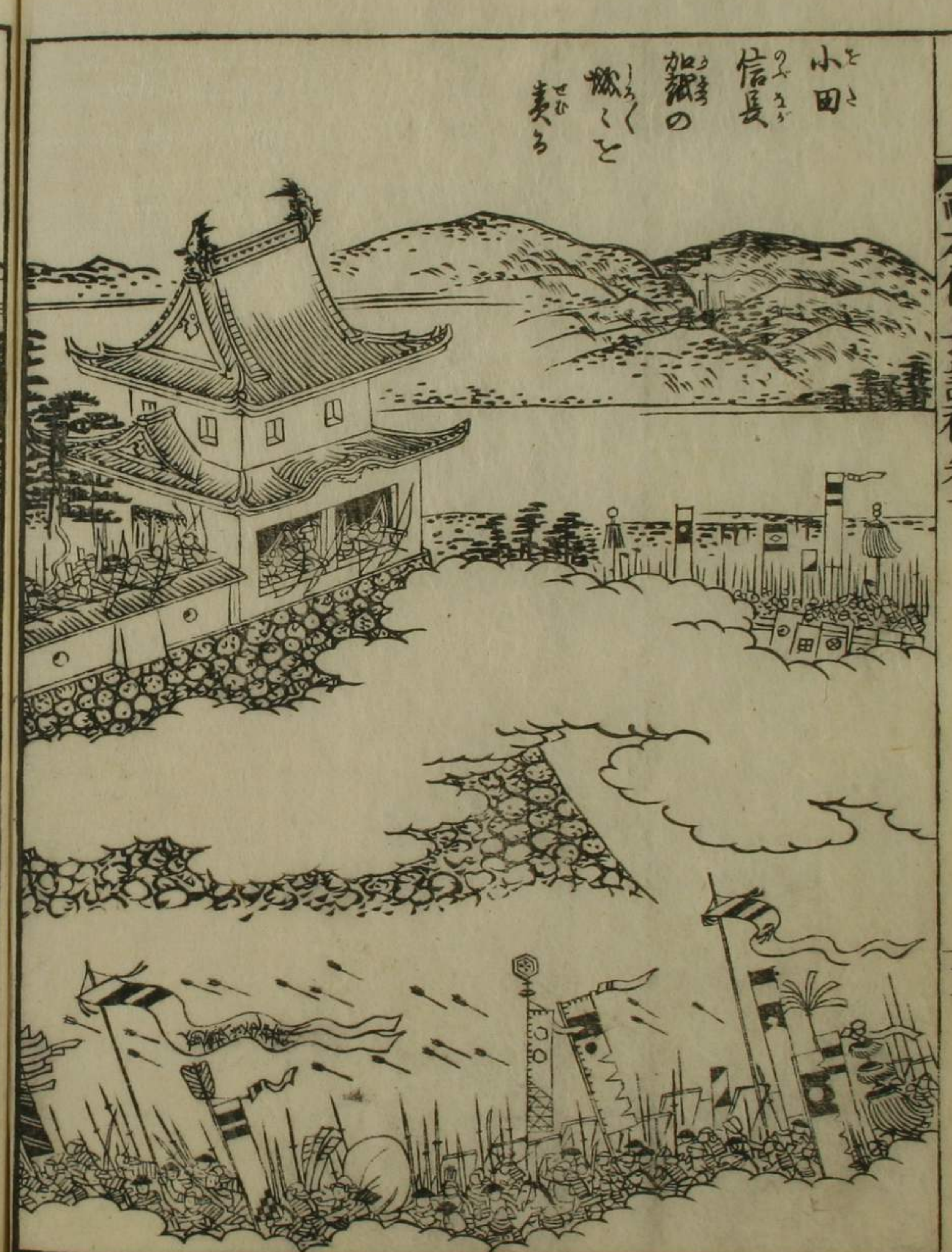
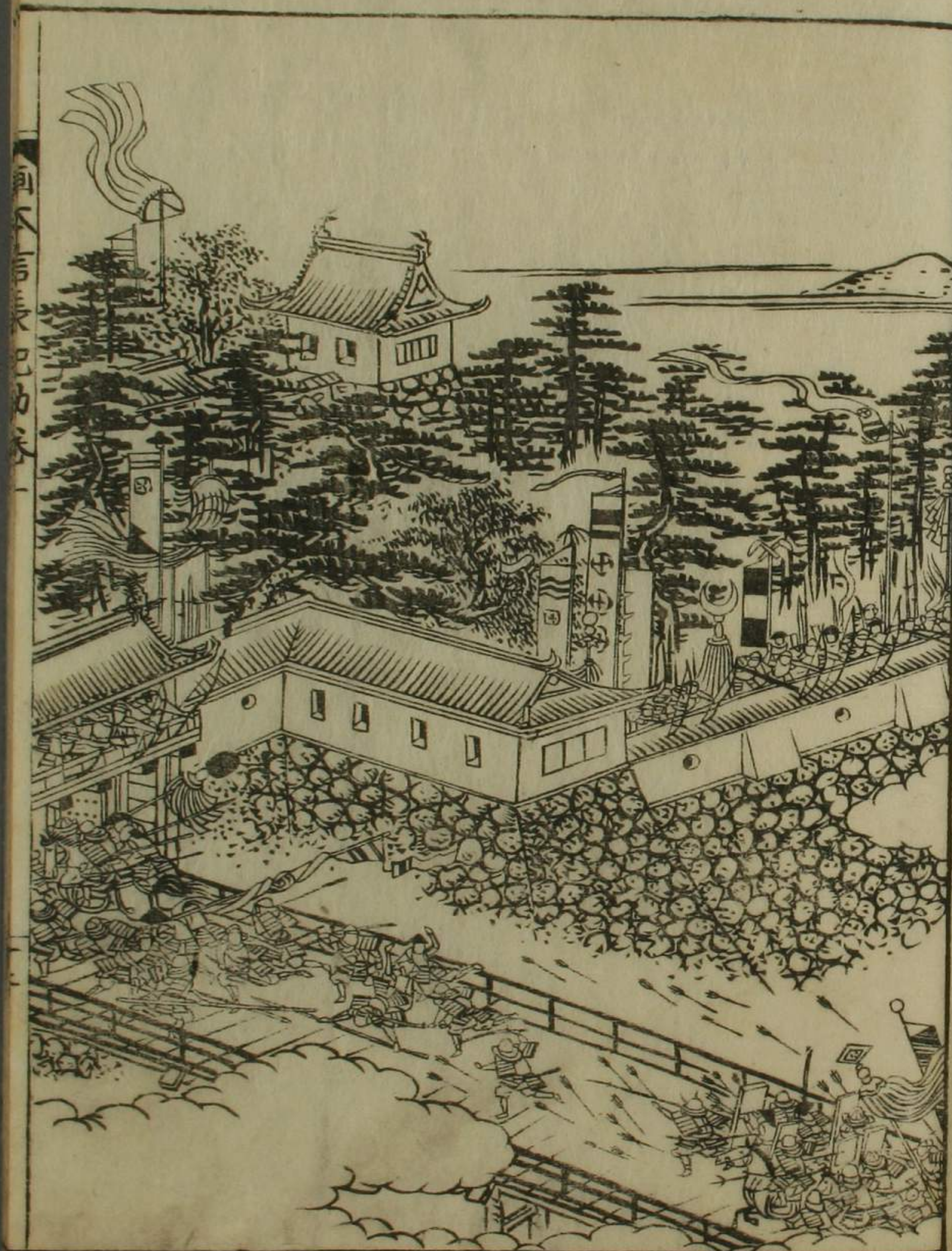
かくれどく隠れて國々下りしつゝ諸國の門後大士小致し

河本寺乃河大乃こそ出来より身と碎き命を捨てて報
められたる所の御恩をうぐしき御極は當らぬと猶乃の
命令と指げ悪麻文音の我く即得付せし時之を以て
みはの國としてよりなる

重幸奇計破矣岩齋幸

天正九年の春信長卿正三任右大臣兼持大納言と叙せらるる
武蔵海内は震ひ毫もゆるが御ありこまかり正月申旬に州
生郡安芸山に居城と築せ七守の天守を建る則先天守の
に月上旬信長卿と洛あり二系妙光寺と宿禰
取守と表らるるきの結構方り日月十日日俄又荒本
兵部と先明智日向守系田中守等と合して本教寺へ
満州軍と引率しむかちと定り馳向ふ先荒本村を
尾崎より海と経く大坂の地を田の郷と岩を構へ川の
先切んと先明智先秀長園後なる石山乃東守は城を
田中守の久回信堂と一むに如く天王寺は後要要宮を
にしる本教寺の虚実を伺ふ其外の満大おろひくは陣
を郷と放火し田中を刈荒し軍威を震へてなりこむ本
は元来覚悟せしむらんが樓岸と本津の岩を大ま
難波口より西國船の連絡とは兵糧とをいへくは
舟人を如く信長系都より先と先西國よりの連絡
兵糧を減らさき幸第一の軍法之急は本津の岩と
樓岸の南三津寺と岩と築き軍勢と築て石山への連絡

満州軍と引率しむかちと定り馳向ふ先荒本村を
尾崎より海と経く大坂の地を田の郷と岩を構へ川の
先切んと先明智先秀長園後なる石山乃東守は城を
田中守の久回信堂と一むに如く天王寺は後要要宮を
にしる本教寺の虚実を伺ふ其外の満大おろひくは陣
を郷と放火し田中を刈荒し軍威を震へてなりこむ本
は元来覚悟せしむらんが樓岸と本津の岩を大ま
難波口より西國船の連絡とは兵糧とをいへくは
舟人を如く信長系都より先と先西國よりの連絡
兵糧を減らさき幸第一の軍法之急は本津の岩と
樓岸の南三津寺と岩と築き軍勢と築て石山への連絡



小田 と
 信長 のぶなが
 加賀 かが の
 燃 も く と
 夷 あ る

日本信長記
 卷之十

交へて後軍巻よせり美濃へと下知し終ひ格段にして猪子兵
 又大津信十郎と攝州へ下り大坂を陣の諸君信長御の御
 下知し陣ひさし本津の岩と美濃と又三月三日の曉天より合
 戦の事苦み定め先陣の三好美濃和州根津守の衆後希和
 泉河内の國侍お知り其勢六万余人後陣の原田信守富山甲
 斐守と大和と山城大和の地侍を併せ其勢八万余人本津の岩と
 美濃と天王寺より押出さるり先主と本願寺へ漏れさる
 多しが珍本寺を諸君と集めて議さるり三津の地は敵方の岩と
 構へ兵糧の通路と塞ぎし味方頗る難儀多しと知りしては敵と
 追拂へばとて先此後國八代の城を相良長門守より略とや
 合ふ本津の岩と入城して此の大坂下向か進志磨に即ちよ力

を併れ根又美濃に母葉は右近兩人を大和と「後陣の組よよ又
 百人と外せりあき山と計策と押へお医」り勝軍の進進とお約り
 玄祖よ小田の先陣三好美濃和州の衆と合戦し本津の岩と攻戦
 んと勢ひ猛り押出むる本津の城より相良長門守に百金誘ね
 梅御の旗朝嵐吹らむと岩より八丁余り押出り陣と三好の
 勢の近付をえり後陣をおつけと飛せ戦を催しさるり美濃和州
 方の兵士とひりて敵兵小勢とを燃と出戦いとるんとは是自ら
 敵をえのひ配かり只美濃と討てり切崩しつ附入は岩と系
 落せやと自ら美濃と槍と上げ敵の傷よ突入さるり双方一度と國
 を焼り槍槍やよりさるり合て戦へり相良長門守と率
 と下知し「惜く交へて戦ひ」が好り負て引退くと三好の勢勝よ

高り遁はしと傳人亂して退りたり源き活殺しく
 多く葦原邊向りて生後里に地帯内の者より入る。時として
 三方角と矢ふ多攻懸る三好軍兵逃るを退りて引入
 らし刺へ出の敵相良が勢りつぐと逃しや其勢本と見あひこり
 いうふとあきれらるふ忽一多の鉄炮耳元は響きまく後の下河
 少進同宮内御勢の多ありまるとみど葦の中より開と他白く
 討てりふ美若森大さふ勢の謀計は落るるをけ敵を切
 崩一足もあく退けよといらり下河とる兵を以美若森逃し
 相良長門守をひりしぬ右の方より開と他つて切てくる三好
 勢い少く勢さいくせんとたちらるる西の方川口は續て一帯
 の細道あり溪辺の方より溪師二人細とるお素の足がけ合

我の形勢は仰天し再びおをいし溪辺の方へ逃りし矢若森
 是とるをいりるるより溪へ出度場とて戦へよと諸軍をち知し
 彼細ると押合踏合引ひて後より相良下河が西勢のむじと退
 討わふ心死腸の若敵を去り溪師はして二丁斗引はしとあみ一
 船の小はあり三好軍勢は川馬と打入後さんといせれた川を
 流去流して人馬の足悉く洗とるを勅くみ流り後より味
 方の勢跡がとるかさるるより素の踏割られ推將と記とる若敵
 附は川より数十艘の小船と鉄炮をいしと並べを人の大船
 端小船と出本川の岩と取り守る志摩とに即度と在ては等と
 行るるに速よ刀と交て佛討とといわれと数百の鉄炮一つ人
 と切て殺ら槍を入り突えと後より相良下河軍兵はとると



飛来の人民
山林に隠る

画才傳長計初巻一

画才傳長計初巻一

五

幸切倒一人も余らなく搦合せし獲わぶ三奴が大勢大討と
 及らるれば汝は馬と打入るを躍らせ遣おんとみまを捕む不忽
 凡とより火と放ら底でうる声一曰と焼より火先天と貴き煙
 地と敷ふ三奴勢或は焼と或は斬と煙いせび返り洗と鉄炮又
 打と突又中らと始ち六ふ余人と倒し大軍悉く打散ささく
 命今く遣とおくる者漸又十人とはるるりたる大石岩毎に
 討る人うりたると良きと助けらと糧焼も脱捨赤裸あり奉
 走と逃出たりしが槍底鉄炮底焼傷るをよ内を傷らとえ
 ぐりかく天王寺引たるいん若しかりたるあさまたり

原田徳中守討記事

去程又後陣又招へる原田徳中守畠山甲斐守の先陣の善信

ふきを心えり軍勢を引て進み多し敵も味方も何地へ引しや
 塵をばよと怪し馳せりわぶ小遠原の中又周の多勢と記
 黒煙立ち上りて合戦のありとまるん南無三皇先陣敵の謀計と
 陥りたり馳向ふと救ふとと無勢をる人被差の中へ一系
 延入るのひと珍本を撃つと知と受け畠田頼母栗津右衛門
 西人鉄炮の組より又百人けり不に埋伏しと後陣の敵と結居け
 と原田が勢のさると勢不と一ふ又百の鉄炮筒先と搦へ度と
 と討入とは元来不意のりうれい原田島山が軍勢一ふ余人ひこ
 くと討倒れし表とむし原田徳中守胸板と二不打扱と降り
 と放り死ころる原田の良き場善三郎其浦五右衛門建隆に即
 他田共七森本勝次等五人の討死をえり今我が記するい

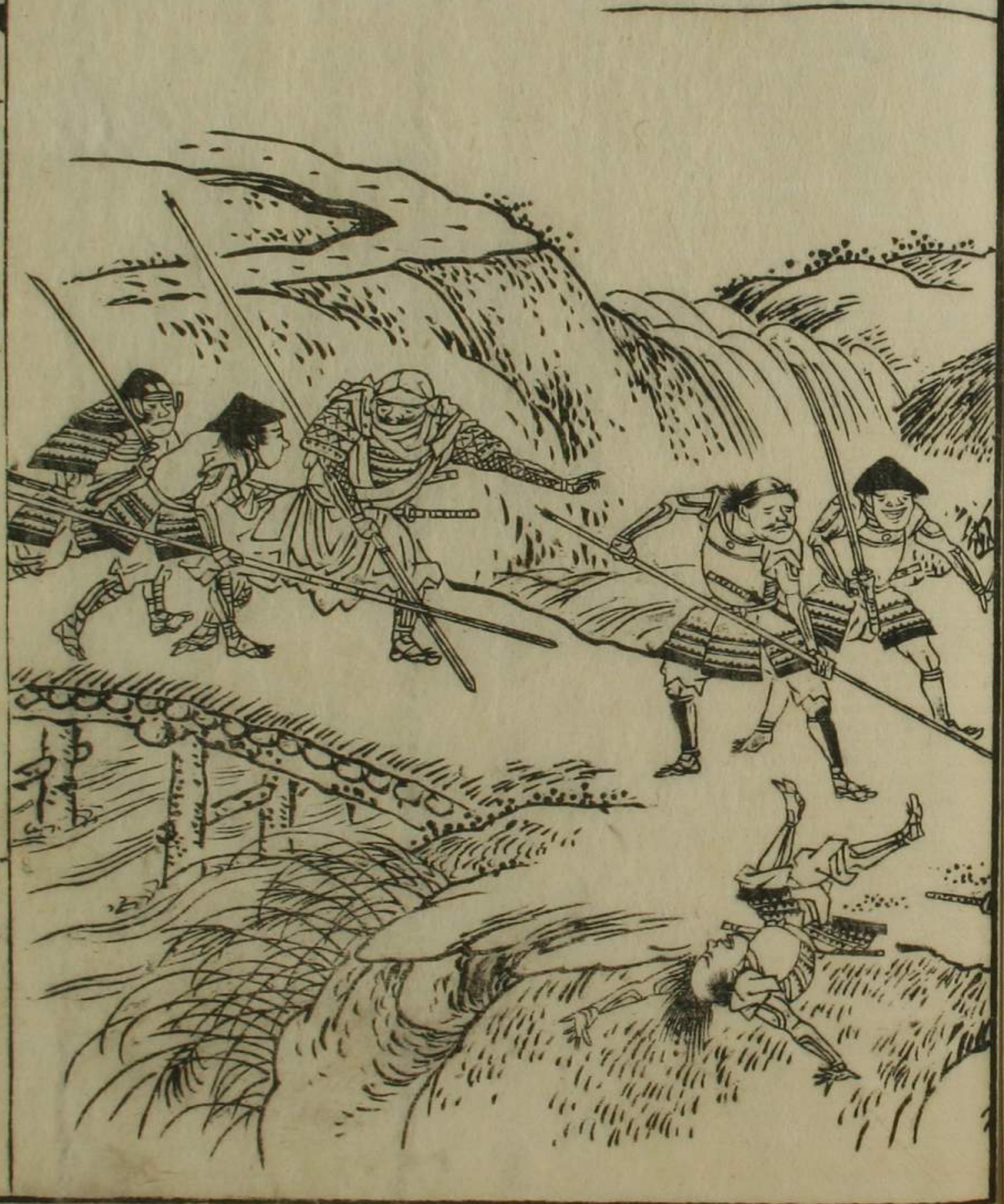
歌い撰りぬいごまきと石山勢の志中へ面もろくに切て火と
らじしと戦ひしが終り一人もあらず討死し義名と後代にのし
たる畠山甲斐守の乱る味方と列せしめ且然ひ且交ると石山勢
の遠征と退討を討死に負致と知りぬんくよめて天王寺
へ引退るる石山勢も長退して不覚と云ふと是も軍兵と引と
勢勝周をとて本陣の岩へ移りたる

予幸奇謀欺小田勢幸

け附小田右大納信長郷を味方して世に多小本親守の志を敗軍
し原田休中守討死のよ具は道進中々ん信長大は終り怒り
終ひ坊主農民の分際として在外の働き勝り少くは我自ら地
向ふと忽ち又美に年来の迷眼と暗に計して即附陣福

ありて又月又日京都とまき其日河内郡の若くは為陣好まらるる日
三万余騎の軍勢と配城の津より信長自軍勢と引て向ひ奉りは
し終り本親守又も信長自軍勢と引て向ひ奉りは
諸おと集め軍の陣候さまく之附は下回に廉とて出てやけ
ろい信長今度高池へ殺向せり殺度の敗軍と勝り勝負と一奉
又又せんと懸しき合戦も又きかり勇者の防禦せんは忽ち
敵軍破らば宗門長く討滅とて宣ふ計略とらぐし敵兵と
退くる方候こそはしとやとろ小親本守幸完亦と
て其ろひてより謀略とては是れが志あるの大軍徹歴又かし
向く信長を討死して法敵の根と斬り強て心を固し終り
又及びひとく一族於本孫市龜井六角を討て討死と授け紙

後
統
法
橋
云
命



州表へ急せ三番定む坊は何中へん計議を志し合で板に方の
 の指にへ軍勢の分配「弓矢砲と備へ今や考ると待押より
 附又八月八日曉天信長が大軍天王寺より押切、本教寺の
 南大へ仕考る先陣は多久向右湯門射松永弾正少弼長岡
 兵部少輔三陣は勝川元近守監輝彦兵部少輔元即左湯門射楠
 系保藤守氏家元系亮安成平左衛門尉計多共三郎三陣を
 信長御旗本馬より熱勢九三万又余千人間の大天地と動し
 美くと攻め突砲を打ちけ矢と飛とるの條と乳はごとく熾
 中の兵は狭間と閉と鳴と志所を牽かお圓と待考るの軍兵
 我一と柵と引のけ逆原本と割「堀裏へは付然と健槍と引け
 く急入んと」たるを牽附かいは」とお圓の突砲と鳴はや

吾や閉とる狭間を二日と閉と開き構へ居る突砲の筒先と並
 て打ち槍長刀の長柄をひて陣は附とる考るの考とととと
 と衝落「突と冷途と防きたる考るの軍兵忽二百騎斗り
 討殺されしとらばとす丁余千人と引とる信長
 後陣はあまけありとまを刃はしきとる考るの考とととと
 先陣二陣一もあり互に互三も美入や退く若実殺さんとと
 配打ちり知れは諸軍是より勵されはく考ととととと
 うつと法と考とる城の中は突と一世の考とるの考とととと
 と捨て防げやと互い「は」め考とる考とる限りは我へは双方も
 負勝しくつ川考とる考とる考とる考とる考とる考とる考とる
 兵一人と考とる考とる考とる考とる考とる考とる考とる考とる

大お信長云一言ヤベミのひてけ交倉へゆりまひけ派大お軍へ
 達せらるる對面ありて終りてと略りてせ給本軍を率ぐ所知と
 ありて三番定む方面貌格好と人よりくぬりてく織の法及七
 条の袈裟水晶の念珠を拵千余人の傍衆と引合し俵の交倉へ
 出たりぬるおの兵士といと人の物とさるぞと鉄炮と止り信長
 御へかくと云し信長守て盗人防む何れをさる云んととらやせ
 よ及び鉄炮とせお殺せと申し終りて多々久向信整隊ありて
 甲隊中へ款お陣取ゆゆと云とやさんとあふ飛る々々てお
 殺さんい君の威光おらたぬ似たり某所名代より出何れより兼
 其より細よりゆりてく小妻崩し終りて信長をと乞ふ
 日じ多々久向を以て其云ふ所は」ゆ終り信整馬よりおのり陣

幕にゆり多々久向右邊門射大おの代代として家より来る人
 の云ふ某うけ終りて云と及」速くゆりてけ時定む坊
 夢をさる」出守り元祖親等と人弘通ありて以来とて
 三百余歳代々天より軍も後仰はしく勅教ありて今も
 ねかくれど」終りを信長一人我宗門と悪く終りて元龜
 元年より天正の今も此門と七ヶ年が向軍馬と向らる多々勢乃
 討死款きてり終りてり」元龜元年徳勝」とやせども宗門
 化身の外國法を能し罪と得べき是へは」傍のりるれを國法
 を好む國部と率へる元龜元年信長御より美崩と云宗
 門永く退賜せんとを款き止りてけ」後」款味方乃
 討死も負給しく我たましく釋門よ生と得るがう衆生の苦惱



重幸
奇計
小田勢
破る



其二





四ノ目 武蔵野の戦

三十一



其三

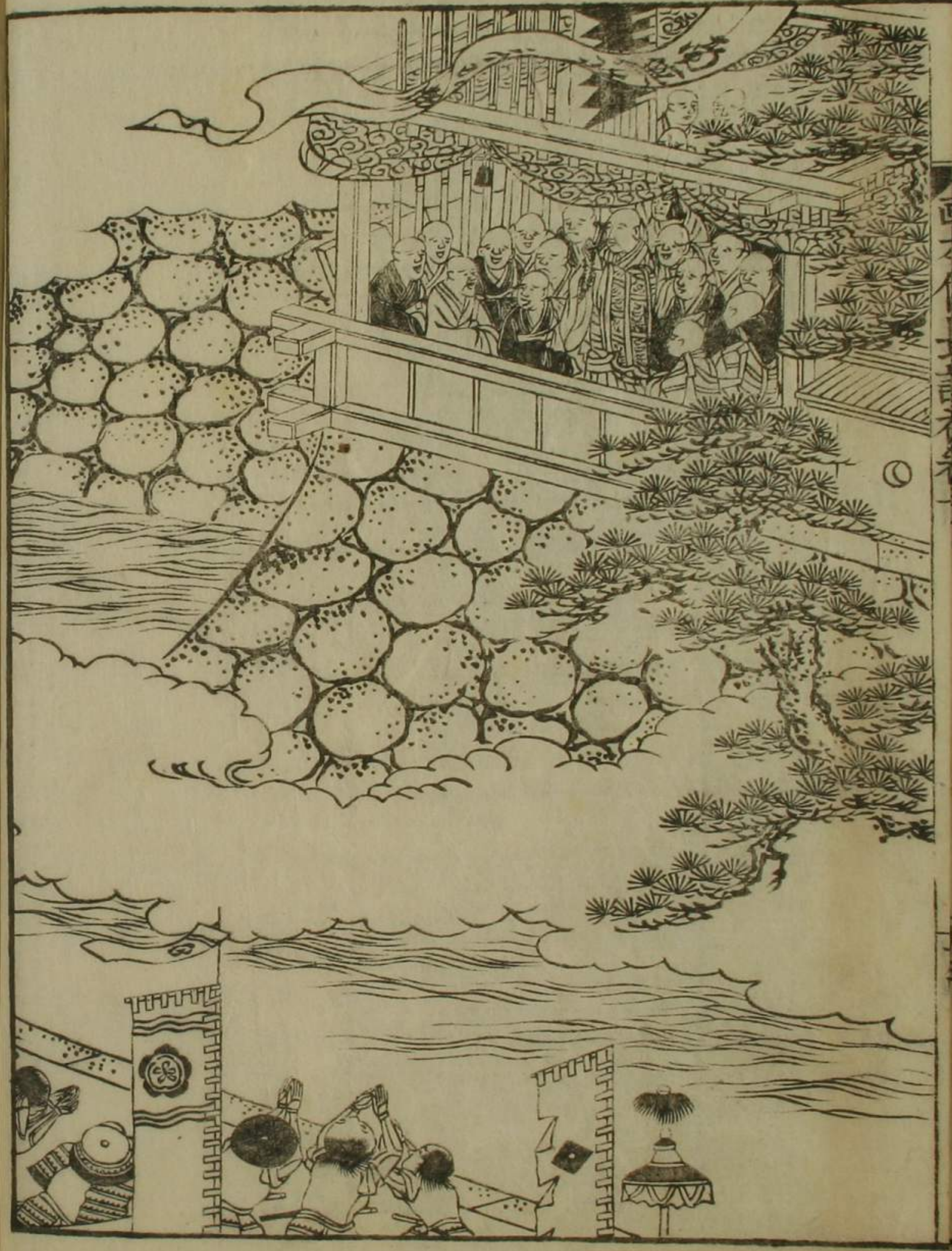
四ノ目 武蔵野の戦

三十二

と救ふ事能はるは修羅國車の中と端しむるも未達の如く
 海はく是へはつれをくは信長御寛大の仁心を以て悪僧を
 人を救へ門後の軍が命令と助け軍勢と退けて宗門と立成たま
 ひるはち羅きを根のくんとおけるをやさんお身は汝はく我
 言と御達もは其間も今朝より歌味方討死の者未奉成佛の志
 佛やさんと西に向つて合掌し無僧と曰るは南無阿弥陀佛くと
 るらう小唄人給へおまの中にも一向宗の門後の者たつた羅
 や勿論や歌方の我くと助け救ふとの大慈悲は如來の御方とい
 うぞらぬの立べきぞ逆羅源き我くは後世のわごとを思はくは
 と鉄炮弓矢と大地の扱とそむか合せく後々れば宗命にあ
 ざう軍兵まくとまに殊勝のそ人のありさまや宣ふありは羅と

借に合掌念佛といはる久回信を大き小困り急ぎ信長御へ
 かくと云とといは信長大と怒り給ひ悪き味方の羅兵系旁僧
 坊主が舌次欺と我下知瓜用いざうこそ奇怪なり念佛をや次
 姉系悉く斬殺し如坊主と鉄炮をそ折倒し一息は山と系系
 やと陣中深く大夢と烈しく下知とほし給へたるや雄の若者
 七八十騎弓鉄炮を引上げて去るは弛出れを一向宗の羅兵系
 皆先よ立ふさぐり佛の脈と救ふんとは悪魔外石のありはひ
 といさせはじと捆とあひ同士討ふそ及びたりけ耐守中と鐘乃
 者ころくと御着きて矢倉くは管弦を奏といはる之も坊衆
 傍と矢口同着は管弦の律も合せ澤と和漢と誦しうらうら
 るくとも羅くおまの軍兵將と給し心と徹し大地は給へ合

しげゆき
重幸再び
小田勢と破



南無阿彌陀佛ととと一心と稱名ととと檢方と

繪本拾遺信長記初篇卷之十六尾

